所　報

1．研究所活動報告

1．講　演　会

1985年10月14日，立教大学，阿倍泰明助教授の“An issue in the theory of anaphora”の講演が行なわれた。

1985年12月6日，津田塾大学，島村礼子助教授の“On lexicalization”の講演が行なわれた。

1986年1月18日，高知大学，大島　新教授の“GB理論とBarriersについて”の講演が行なわれた。

1986年2月5日，立教大学，中野　光教授の“1920年代の教育改革とキリスト者たち一長野県のばあいを中心として一”の講演が行なわれた。

1986年2月5日，教育学科研究員，咸水坤氏（Ham Su-Gon），韓国文教部教育課程担当官の“韓国の教育の現況について”の公開講演会が行なわれた。

1986年5月12日，カリフォルニア大学，ロスアンゼルス校，赤塚紀子教授の“Conditionals Revisited”の講演が行なわれた。

1986年6月4日，讃岐和家教授の“日中教育放送シンポジウム及び中国の小，中学校，大学放送教育機関について”の公開講演会が行なわれた。

2．研　究　員

Dr. San-Yong Huang, Veterans General Hospital-Tacehung, Vaers Tacehung, Taiwan, Republic of China, “Aneurolinguistic Approach to the study of language impairments among Chinese aphasics”の研究で教育研究所研究員として，1986年4月から1987年3月迄。

中山　治，静岡女子短期大学講師，（心理学），「日本人のコミュニケーションに対

する比較文化的研究」で教育研究所研究員として，1986年10月から1987年３月迄。

原　和子　元東洋英和女学院中高部教諭，教育研究所見習研究員（星野　命教授担当）として1986年９月より1987年３月迄。

研究室活動報告

教育哲学研究室

＜人の動き＞

研究休暇

立川　明助教授（現準教授）：1985年12月，研究休暇を終えてアメリカ合衆国より帰国。

川瀬謙一郎教授：1986年４月～87年３月まで研究休暇。

＜研究活動＞

共同研究

「道徳教育における宗教教育の意義に関する基礎的研究――日・独・米の比較を中心に――」（昭和61年度文部省科学研究費補助金交付一般研究B）：讃岐和家教授を研究代表者として，川瀬教授，デューク教授，立川準教授，林助教授，佐藤助手，高橋助手，山室助手，吉岡助手，結城助手，松浦助手の11名の研究室メンバーが参加している（２ヵ年継続）。毎月定例研究会をもっている。また，研究合宿を行なった（1986年７月10～12日，箱根対岳荘にて）。

講演会

1985年11月18日：岸　信行中央大学助教授，「教育哲学研究の深まりを求めて――フレーベル教育哲学を例として――」。

1986年２月５日：中野　光立教大学教授，「1920年代の教育改革とキリスト者たち――長野県の場合を中心として――」。（教育研究所との共催）

1986年６月26日：森田尚人聖心女子大学助教授，「歴史のなかの子ども・家族・学校」。

研究会など

1985年９月22～23日：大学院教育哲学研究室秋季研究合宿（修士論文中間発表を中心に）。

1986年２月12日：教育学科教育学専修生卒業論文・大学院教育哲学専修生修士論文発表会。

1986年４月26～27日：大学院教育哲学研究室春季研究合宿（新入生研究発表を中心に）。

1986年８月５～６日：ICU教育セミナー（東京青山会館にて。卒業生教員および学部生・院生，ICU教員の計約30名参加）。講演：山口和孝埼玉大学助教授（元当

研究室助手)「教育改革の動向」。

なお，当研究室の助手・院生を中心としたICU教育学研究会が，月例で研究会を開催し，活発な研究発表・討議が継続されている。

讃岐和家教授

Ⅰ．研究活動

1．現代アメリカの教育哲学の研究

2．現代社会における教育的価値論の研究

3．キリスト教主義学校の教育の在り方の研究

4．1985年度を最終年度とする文部省科学研究助成金による総合研究『教師教育制度改革の先導的研究』(研究代表者は早稲田大学，鈴木慎一教授）に研究分担者として参加。

5．1986年度を初年度とする文部省科学研究助成金による一般研究『道徳教育における宗教教育の意義に関する基礎的研究――日・独・米の比較を中心に――』に研究代表者として参加している。

6．1986年5月4日から12日まで，教育放送国際交流協会および中国中央電視台の共催による「中国の新しい教育放送像を求めて」と題するシンポジウムに参加し，その前後，中国の教育放送に関する視察と調査研究を行った。

Ⅱ．研究発表

1．1986年6月4日，教育研究所および教育学研究室主催の研究会で，「中国における教育放送の現状について」と題する発表を行った。

2．同年6月7日～8日，本学で開催された一般教育学会第8回大会の第1日目において，中川秀恭教授による基調講演「リベラル・アーツと一般教育」の司会者をつとめた。また，同大会の第2日目において，「高等教育における一般教育の位置づけ」を主題とするパネル討議の司会者をつとめた。

Ⅲ．その他の活動

1．一般教育学会，常任理事，学会誌常任編集委員

2．日本教育学会　学会誌英文校閲担当（86年3月まで）

3．文部省　一般教育視学委員会委員（主査）

4．三鷹市　教育委員

5．キリスト教学校教育同盟　キリスト教学校教師養成事業委員会委員

6．全国私立大学教職課程研究連絡協議会　事務局長

7．関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会　事務局長

8．教育放送国際交流協会　理事

川瀬謙一郎教授

Ⅰ．研究活動

1．ウエーバー及びベラの宗教社会学の研究

2．教職課程における視聴覚教材の導入に関する研究（関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会，第2研究部会による共同研究）

ベンジャミン・C・デューク教授

Research :

Key Schools of China (Beijing, Shanghai, and Sian)

British Teenage Students and their Teachers: Attitudes Toward Japan and the Japanese. (Grant from the Social and Political Institute of Japan)

Publications :

Book : The Japanese School: Lessons for Industrial America, Praeger Publishers, July, 1986

Articles : The Liberalization of Japanese Education, in Comparative Education (England), Volume 22, Number 1, January, 1986

Travel :

China (November, 1985)

England and the United States (Summer, 1986)

Others :

English Editor, Japanese Journal of Educational Research, Japanese Society for Education

立川　明準教授

研究活動：

1985. 9．1．～11. 30. までは，前年に引き続き，Harvard Graduate School of Educationに客員研究員として滞在し，学位論文の訂正作業を進めるとともに，Univ. of Maine at Orono, Univ. of New Hampshire, Dartmouth College, Univ. of Vermont, Univ. of Massachusetts at Amherst等を訪問して，モリル法の実施に関わる第一次資料を収集した。帰国後は，これら資料の分析を含めて，科研費による2つの研究プロジェクトに関係しながら，19世紀ニュー・イングランドの農業・工業・教育の特質を主に研究している。

また，心理学の栗山容子助教授を補助して，本学での教育実習の評定のデータの分析を行なっている。

学会発表等：

1986. 5. 17. ～18.　立命館大学に於いて開催された教師教育研究大会に於いて，「教育専門科目の成績と教育実習の成績の相関に関する研究」と題する発表を行なった。

著　作：

"Private vs. Public" Colleges in Mid-Nineteenth Century Massachusetts : The Ordeal of the College of the Holy Cross in 1849.『教育研究』28, 1986, 1～24.

そ の 他：

大学セミナー・ハウス国際セミナー委員：（1986．4．まで）

大学基準協会，教員養成のあり方についての委員会委員：

日本教育学会「教育学研究」英文校閲係。

林　昭道助教授

Ⅰ．研究活動

a．近代ドイツの人間観・教育観の研究

b．ゲーテの人間観・教育観　〃

c．E．シュプランガーの思想史　〃

Ⅲ．著作など

a．「シュプランガーとゲーテ」，林　昭道・シュプランガー：『国民教育を支えるもの』，明治図書，1986年5月，9～60頁。

b．『国民教育を支えるもの』（シュプランガー著，編訳著）明治図書，1986年5月。

高橋　浩助手

Ⅰ．研究活動

1．O．F．ボルノーとM．ブーバーを中心とした教育者と被教育者との教育関係論の人間学的な研究。

2．O．F．ボルノーにおける教育と宗教との連関についての検討。

Ⅱ．学会発表

1．「ボルノーにおける教師論の特質」，関東教育学会第33回大会，（1985年9月24日，於横浜国立大学）。

2．「ブーバーの哲学的人間学の現代的意義」，教育哲学会第28回大会，（1985年10月12日，於岡山大学）。

Ⅲ．論　　文

「ボルノーの『教育的雰囲気』論についての一考察」（『関東教育学会紀要』第12号，

1985年）

松浦良充助手

Ⅰ．研究活動

1．文部省科学研究費交付総合研究(A)「アメリカ教育における等質とエクセレンス追求の史的研究」（研究代表者：竹市良成愛知学院大学助教授）の第1グループ共同研究「エクセレンス追求の実情とその社会的要因の歴史的研究」（責任者：市村尚久早稲田大学教授）に研究協力者として参加。

2．今世紀のアメリカ合衆国における教育改革の史的展開と伝統主義教育思想の変容過程との関連についての研究。

3．高等教育における「教育学」教育実践の理論化を試みる研究。（大学教育実践研究会による共同研究。）

Ⅱ．学会発表等

1．「文献研究：J.R. Pole, *The Pursuit of Equality in American History.* (1978)」（大江正比古東京電機大学助教授との共同発表），昭和60年度第2回アメリカ教育史研究会（「アメリカ教育における等質とエクセレンス追求の史的研究」共同研究），於広島市，1985年10月9日。

2．「M. J. アドラー教育改革論の思想史的位置」，教育哲学会第28回大会，於岡山大学，1985年10月13日。

3．「パイデイア教育改革提案（1982～84年）の教育思想史的背景――R.M. ハッチンズからM.J. アドラーへ――」，日本デューイ学会第108回東京地区研究談話会，於早稲田大学，1985年12月14日。

4．「『教育原理』教育の七段階指導法から何を学ぶか――とくに八王子合宿教育実践への研究アプローチをめぐって――」，第10回大学教育実践研究会，於杉野女子大学，1986年4月20日。

5．「『教育原理』の教材としての『メノン』再考」，第12回大学教育実践研究会，於国際基督教大学，1986年8月15日。

Ⅲ．著　作（研究論文等）

1．「シカゴ・プランとR. M. ハッチンズ――1930～40年代のシカゴ大学カレッジ・カリキュラム改革をめぐって――」，『教育研究』第28号，国際基督教大学学報Ⅰ－A（教育研究所），1986年3月，pp. 25～48。

2．「開発教授法」「五段階教授法」「新教育運動」「大正自由教育」「生活綴方」の5項目執筆，『現代子ども大事典』（平山宗宏東京大学教授編集代表），中央法規出版，近日刊行予定，計10頁。

3．「パイデイア教育改革提案（1982～84年）の問題点――M. J. アドラー教育改革論の批判的検討――」，『教育哲学研究』第54号，教育哲学会，1986年，pp.

57〜71。

Ⅳ．そ の 他

1．（翻訳）ベンジャミン・C・デューク国際基督教大学教授著「“ジャパン・バッシング”で対日観は変ったか」，（松浦陽子との共訳），『中央公論』1986年7月号，中央公論社。

2．第9回ICU教育セミナー（於東京青山会館，1986年8月5・6日），事務局担当世話人。

3．ICUアジア文化研究所研究助手として研究所の諸活動の補助的業務に従事。

佐藤尚子助手

Ⅰ．研究活動

19世紀後半より1952年まで，中国において展開されたキリスト教大学・中学校の教育について，中国ナショナリズムとの関わりを中心に，中国近代教育史全体構造の中で，その位置と役割とを明確にする。

Ⅱ．学会発表

1985年10月10日　教育史学会29回大会（於広島大学）「中国近代教育の展開とミッションスクール」

Ⅲ．著　　作

1．「キリスト教宣教会の中国における教育活動―プロテスタント系13大学を中心にして―」霞山会刊『米中教育交流の軌跡』所収。

2．『社会科教育の新研究』（共著）耕人社刊

山室吉孝助手

Ⅰ．研究活動

① デューイの思想における非合理なものの役割。

② ジョナサン・エドワーズとジョン・デューイの比較。

③ 道徳教育の日本の歴史。

Ⅱ．著　　作

① 『道徳教育の研究』中央大学通信部1987年4月発行（共著）

結城敏也助手

Ⅰ．研究活動

a）「哲学」や「倫理学」の「学」の内部に表象される特定のイデアとしての人間像と，「教育」という実践の場で獲得される人間像との差異の研究。

b）人間像変遷の問題については，現代「世界」での問題としても研究。これについては，全国若手哲学研究者ゼミナールで「『人間』の変遷」という題目で発表。

また同ゼミナール発行の「哲学の研究」誌上に「コトバとヒト」という題で掲載予定。

c）これに加えて研究の一方での基礎的な論点として，「解釈」という行為の主観性（非客観性）についての考察を深めることを意図していた。その手段として，「世界一内一存在」としての現存在の行為として「解釈」を定位させようと試みた。その適用として，「キェルケゴールの「視差」」という論文を著述，「教育研究」に掲載した。この問題についての理論的考究は，The Worlds as the Field of Existence という題で「ICU比較文化」に掲載予定。

d）恩師財団母子愛育会日本総合愛育研究所プロジェクト研究研究員（嘱託）として，ハンデキャップを持った児童の学習遅滞に関する調査に従事。

Ⅱ．学会・研究会参加

日本宗教学会，日本倫理学会，東北哲学会，比較文明学会の諸大会に参加

日本若手哲学研究者ゼミナールに参加

Ⅲ．研究論文・研究発表等

キェルケゴールの「視差」（教育研究28掲載　国際基督教大学学報１－A）

昭和61年７月「人間」の変遷（全国若手哲学研究者ゼミナール第14回大会発表）

吉岡良昌助手

I.　研究活動

1．キリスト教教育哲学の研究，特にカルヴァンの教育思想の研究を中心に研究。

2．文部省科学研究助成金による共同研究「道徳教育における宗教教育の意義に関する基礎的研究」（研究代表者：讃岐和家国際基督教大学教授）に研究協力者として参加。

Ⅱ．学会発表等

1．「公教育における教育と宗教一日曜日訴訟の事例一」，改革派神学会，1986年７月２日。

2．「カルヴァンの教育思想とその系譜」，日本基督教学会第34回学術大会（於東京神学大学，1986年９月29日）。

Ⅲ．研究論文

1．「近代公教育における教育と宗教」『教育研究』（国際基督教大学学報I－A）第28号，1986年３月，pp. 67～86。

2．「カルヴァンの教育思想１～４」『まじわり』1986年２月号～５月号（まじわり出版局）

3．「教会の教育的使命一教育的伝道について一」（日本基督改革派教会中央宣教研究所『紀要』第11号，1986年）

心理学研究室

人の動き

1985. 9　原　一雄教授は1年間の研究休暇に入る。

1986. 4　小谷英文助教授が広島大学より着任。

心理学談話会・コロキウムなど

1985. 12. 3.　心理学コロキウム「ＳＰＳＳ－Ｘを使ったデータ解析の実際――因子分析法を中心として――」石塚正一（国際武道大学講師）

1986. 2. 4.　映写会「からだといのちとたべものと」グループ現代

1986. 2. 27.　Open Lecture「構造的家族療法」信国恵子（セラピスト）

1986. 6. 13.　心理学フォーラム「カナダにおける専門職としての心理学の展望」"—The evolution of Psychology as a Profession in Canada ——Personal Observations——" E. G. Nichols (Canada Mount Allison Univ.)

発表会

1986. 2. 5.　修士論文発表会　発表者：鈴木，福田，乙竹，山中

1986. 5. 13.　卒業論文発表会　発表者：14名

1986. 5. 29.　修士論文発表会（6月卒業生）発表者：田代，山口

1986. 6. 5.　卒業論文発表会（6月卒業生）発表者：田口，美濃口

セミナー

1986．7．7．～7．10　心理学サマーセミナー　於：八王子セミナーハウス

その他

1986．3．13．　非常勤講師慰労会　於：聘珍楼（吉祥寺）

原　一雄教授

Ⅰ．研究活動

1．神経心理学的研究：大脳半球の機能的非対称性とニコチンの精神薬理的効果

2．社会的態度の変容：国際交流プログラムによる国民性イメージの変化

3．大学教育の総合評価：a）　教養学部に関する統計資料の追加収集

b）　卒業生のＩＣＵ在学経験に関する第２次追跡調査

c）　入学試験一般能力調査の妥当性に関する研究

d）　大学教員用研修プログラムの開発

e）　海外における教養教育の最近の動向を視察

Ⅱ．学会発表等

1．「環境－行動研究」日米合同セミナー（The Joint U.S.-Japan Seminar on Environment-Behavior Research）（於 Univ. of Arizona, Tucson, 1985．10．9）にて "A model for transdisciplinary concepts of 'environment' and survey studies of college campus atmosphere." を口頭発表した。

2．日本生理心理学会第4回学術大会（於大阪大学人間科学部 1986．5．11）にて「脳波における半球間非対称性の研究：その2 イメージ想起中の脳波に及ぼすニコチンの効果」を口頭発表した。

3．「たばこを考える」シンポジウム（於東京都港区虎の門葵会館 1986．5．19）にて「第1部 ニコチン・アディクションの再検討」の座長を務め，「喫煙行動に対する心理学的モデル」を口頭発表した。

Ⅲ．著　　作

1．「ラテラリティ」，宮田 洋・藤沢 清・柿木昇治（編）［生理心理学 第2部 2，3］，朝倉書店，1985，186－196

2．「意識の次元」，玉野井逸朗・上村保子・坂井昭宏（共編）［認識と行動 8］倍風館，1985，149－166

3．「マウスの疲労耐性に及ぼす多世代継続ニコチン投与の影響」，［動物心理学年報］，1985，35(1)，49－50

4．（絹川正吉共著）「大学教員評価の視点 その2，方法と基準について」，［一般教育学会誌］，1985，7(2)，63－65

5．「国際基督教大学における入学者選抜について――基本方針と実践的課題」，［大学入試フォーラム］，1986，7，71－80

6．「大学教育と入学者選抜方法」，［教育研究――国際基督教大学学報Ⅰ－A］，1985，27，87－100

7．"A model for transdisciplinary concepts of 'environment' and survey studies of college campus atmosphere." In Ittelson, W. H., Asai, M., & Ker, M. (eds.) *Cross Cultural Research in Enironment and Behaior.* Univ. of Arizona Press, 1986, 101－116.

Ⅳ．そ の 他

1．（講演）「認知と情動の発達ならびに障害の診断方法について」，宇都宮大学教育学部附属養護学校（於宇都宮），1985．11．20．

2．（発題）「アメリカ合衆国における教養教育の最近の動向：復興か改革か」，国際基督教大学教授会退修会（於諏訪湖），1986．3．19．

3．（書評）「"Language Sciences" 誌が「神経言語学」を特集：［言語］を媒介として［行動の理論］を構築」週刊医学界新聞 1986．4．21．

4．（書評）「D.A.ブライ著／山口栄一訳［大学の講義法］玉川大学出版部」［IDE：現代の高等教育　民主教育協会誌］（№269），1984，13～18

5．（講演）「認知過程に及ぼす喫煙の効果」，日本たばこ産業株式会社（於虎の門）1986．3．26.

6．研究助成金

(1) 文部省科学研究費（海外学術調査），日米教育比較研究・高等教育班（主査天城勲），1985.

(2)（財）たばこ総合研究センター委託研究費，認知過程に及ぼす喫煙の効果：生活空間と脳波変動，1985．

(3)（財）吉田　茂記念事業財団学術研究奨励基金研究助成，日米相互理解調査研究，（代表井上擁雄），1985．

7．学会役職

(1) 日本心理学会，［心理学研究］，［*Japanese Psychological Research*］誌編集委員，日本心理学会研究奨励賞選考委員

(2) 日本生理心理学会，運営委員，［生理心理学と精神生理学］誌編集副委員長，英文アブストラクト委員

(3) 日本基礎心理学会，運営委員，［基礎心理学研究］誌常任編集委員

(4) 日本教育心理学会，［教育心理学研究］誌編集委員

(5) 国際基督教大学神経言語学研究会，運営委員，［*J. of Neurolinguistics*］誌　Associate Editor

(6) 「幼児の幸せを考える会」，「INREALセラピー研究会」顧問

星野　命教授

Ⅰ．研究活動

1．前年に引続き，東京学芸大学海外子女教育センターにおける「帰国子女の心理臨床的研究プロジェクト」に座長として参加し，毎月1回，これまでに14回の研究会を開いて研究を進めている。研究委員としては，稲村博（筑波大学），兼城和子（世田谷区上北沢小学校），杉田敬子（杉並区立済美教育研究所），田村毅（筑波大学），野口正成（東京学芸大学），藤原喜悦（東京学芸大学）の精神科医，学校教員（帰国子女教育担当），カウンセラー，心理学研究者で構成されている。

プロジェクトの目的は，「帰国子女の適応不適応」と一般に呼ばれている現象を心理面から深く掘り下げ，不適応とは何か，不適応を引き起す要因は何か，不適応を防ぐには，どういう方策があるか，また帰国子女の健全な発達・自己実現の方途は何かなどの解明をめざすものである。

研究のアプローチとしては三種あり，一つは「ヒアリング」と称して，日頃帰国子女に接している人々から帰国子女を取り巻く環境について，また不適応と思われる事

例について具体的な話を聞き，それについて委員間で討議を行った。これまで，帰国子女の担任教師，帰国子女のための専任教師，養護教諭，教育委員会指導主事，「外国語教室」担当教師，精神科医，民間のカウンセラーなど，計14名から，1～2回ずつヒアリングを行なった。

第2の方法は，「児童・生徒生活チェックリスト」の作成と実施である。これは，学校で帰国子女に接している教師が，日常の帰国子女の動静から，その適応状態を判断する際に参考となる徴候を列挙したものである。項目内容は，身体面・行動面，対人関係，心理・精神面にわたり65項目から成る。これを帰国子女受入れ校数校に配付し，帰国子女を担当している担任教師に一人一人について記入してもらった。

その結果は，チェックリストの妥当性を検討するためと，海外滞在年数，同回数，さらに母親の適応状態と子どもへの態度などと子どもの適応状態を検討するために利用された。

第3の方法は，文献研究で，最近2年間以内に発表された「帰国子女の適応」をめぐるトピックを扱った研究論文や著作をプロジェクトメンバーが紹介し，みなで討議するというもので，既に数篇がとりあげられた。

このプロジェクトは，1988年5月までの予定で研究を進めているが，今後は，帰国子女の内的安定性・満足度・居心地・アイデンティティの危機などを，環境特に家族・友人・教師との関係に留意して，事例や調査結果を検討して行く予定。また，研究成果は，いずれ報告書の形でまとめられる予定。

2．常盤大学の長井進氏との共同研究「青年期における異文化体験の自我同一性ステータスに及ぼす影響」に昭和61年度文部省科学研究補助金（一般研究C）を得て，面接および質問紙調査を実施中。この研究は，高校生の交換留学計画である“American Field Service”で渡米した日本人高校生について，渡航前，留学中，帰国後の諸種の知的・情動的・社会的意識や態度の変化を，青年期特有の自我同一性・ステータスに関連させて，調査しようというもので，2年間続く補助金（130万円）を用いて，約300名を対象として行われる。

3．「文化と人間」の会（異文化間心理学研究会）の例会をほぼ隔月に主宰し，異文化心理学の課題と関連トピックをめぐって毎回2人ずつの話題提供者に発表を願って，その内容についての討議を司会した。

4．本学歴史学教授源了圓教授を代表者として文部省科学研究補助金を受けた共同研究「日本文化における『型』の研究」のメンバーとして，隔月に行われた研究会に参加した。8月9日には予備報告として「人と人との出合いに『型』があるか」について発表した。

Ⅱ．学会発表等

1985年10月18・19日に日本女子大学で開催された日本人間性心理学会第4回大会第2日の公開シンポジウム「人間性心理学の課題と展望」に指定討論者の一人として参加し

た。

1985年11月3－5日に横浜国立大学で開催された日本心理臨床学会第4回大会において研究発表C－11室の司会を担当した。

1986年5月11日に明治大学で開かれた九学会連合大会に出席した。

1986年5月16・17両日に国際基督教大学および高等学校を会場として開催された「異文化間教育学会第7回大会」に準備委員会委員長として，また第2日の午後行われた公開シンポジウムの企画者および司会者として参加した。テーマは「海外帰国児童・生徒の『性格及び行動』の記録（生徒指導要録）と評価をめぐって」であり，3人の口頭発表者を迎え，討論の司会をも担当した。

1986年8月29－31日に大阪府高石市羽衣荘で開催された日本心理臨床学会第5回大会に，研究発表の部B第13室の司会者として，D第10室の指定討論者として参加した。また参加者企画シンポジウムⅢ（第1日夜）の「異文化間カウンセリング・心理治療の体験と課題」に4名の口頭発表者を迎えて，討論の司会を担当し，この分野の課題をも展望した。

Ⅲ　著作・論文

1．「カルチュア・ショックと学習」，『教育と医学』，33巻7号，1985年7月号，慶応通信，26－41頁。

2．民族的帰属意識――エスニック・アイデンティティの任意性――，「文化人類学」vol. 1，No. 2，1985，アカデミア出版。34－45頁。

3．「ライフサイクルと危機新論」，日本家族心理学会編，『家族心理学年報④ライフサイクルと家族の危機』1986，金子書房，53－65頁。

4．「二〇答法」，詫摩武俊監修『パッケージ。性格の心理　第6巻性格の理解と把握』1985，ブレーン出版，169－185頁。

5．「カルチュア・ショックと性格」，詫摩武俊監修『パッケージ・性格の心理　第4巻性格の諸側面』，1985，ブレーン出版，120－141頁。

6．（編著）『社会心理学の交叉路（クロスロード）』，1986，北樹出版。

7．「社会的動物としてのヒト」，「文化を創造し継承する人間」，「青年の『心の風土』としての原風景」，星野命編著『社会心理学の交叉路（クロスロード）』，前出，10－15頁，25－40頁，168－201頁。

8．「帰国子女教育の研究体制」，「教育施設・研究機関の情報ネットワーク」東京学芸大学海外子女教育センター著『国際化時代の教育――帰国子女教育の課題と展望』第3章第3，4，5節，1986，創友社，204－234頁。

9．「文化とストレス対処行動――心理学の立場から――」，『ストレスと人間科学』No. 1，1986，広英社，171－174頁。（1985年11月30日に行われた日本ストレス学会第1回におけるシンポジウムでの発言要旨）

10.「異文化対処の失敗とカウンセリング」,『教育と医学』1986年10月号　慶応通信，12−21頁。

Ⅳ．そ　の　他

1．前年度にひき続き「『文化と人間』の会」の例会を1985年9月29日，同年12月8日，1986年2月2日，4月6日，6月22日とほぼ隔月に主宰し，異文化間心理学，同コミュニケーション，海外帰国子女教育に関連あるトピックについて毎回2人からの口頭発表を聴き討論を司会した。

2．次の各大学に非常勤講師・講演者として出講した。

① 広島大学教育学部において「異文化間教育心理学」の集中講義を行なった。1985年12月2−4日より通年で。

② 東京大学文学部社会心理学科　1986年夏学期に「社会心理学特殊講義　パーソナリィの社会心理学」（2単位）を講義。

③ 東京国際大学大学院社会学研究科　1986年4月より通年で毎週1回「異文化間社会心理学」を講義。

④ 大阪大学人間科学部の行動学専修生のために「異文化間の心理学の課題と展望」について集中講義で行なった。（1986．6．1−5）

3．各種のワークショップ世話人，研修会講師など

① 全国学生相談研修会（1985．11．26−27　於虎の門国立教育会館）において管理職の部会の世話人・司会をつとめた。

② 「いのちの電話」全国大会（1985．11．7−9，於松島）におけるグループ別研修の研修委員をつとめた。

③ 日本語教師教育に関するシンポジウム（1986．1．18，住友ホール）に発表者の一人として出講した。また，同趣旨のセミナー（1．22および29新宿朝日カルチャーセンター）に出講した。

④ 東京多摩いのちの電話の研修委員の一人として随時，ボランティアの基礎訓練とロールプレイとスーパーヴィジョンを担当した。

⑤ 日本航空主催「海外派遣家族セミナー」（1986．5．15，於高輪プリンス）に講師の一人として「海外子女教育」について講演した。

⑥ 日本ルーテル神学大学「人間の成長とカウンセリング」研究所主催のカウンセリング講座（1986．6．23・24）で「性格は変えられるか」と題して二度講演した。

⑦ 親業訓練協会主催による上級講座に出講した。（1986．8．23）

都留春夫教授

Ⅰ．研究活動

(1) グループ・アプローチ

(2) カウンセリングとフォーカシングの体験過程

Ⅱ．学会活動

(1) 日本人間性心理学第４回大会　研究発表座長　1985年10月19－20日　東京

(2) 日本心理臨床学会第４回大会　コメンター　1985年11月３日－５日　横浜

(3) 日本家族心理学会第３回大会　出席　1986年６月７－８日　仙台

Ⅲ．著作など

(1)「国際基督教大学における国際交流の現状と問題点」大学基準協会国際交流委員会（Ｊ.Ｕ.　Ａ.Ａ. 内外大学関係情報資料10）『国際交流の新展開を求めて』126～143頁（1986）

(2)「家族をグループとして見る立場から」『心理臨床ケース研究』３（亀治憲治「チック症児に対する家族療法の事例」に対するコメント）98－103頁（1985）

(3)「子どもにとってのよい家庭の条件：豊かなこころを育てる場として」『兒童心理』第40巻第４号（No.491）１－11頁（1986）

(4)「子どもにみられる希望と絶望――いのちはぐくむもの」『兒童心理』第40巻第10号（No.499）198－207頁（1986）

(5)「カウンセリング概論」（茨城県商工経済会人間関係研究所。カウンセリング入門講座講演記録）その１「カウンセリング」第17巻第３号（No.67）14～18頁（1985），その２「カウンセリング」第18巻第１号（No.68）13－20頁（1986）

(6)「カールのまなざし」畠瀬道子・畠瀬　稔・村山正治編『カール・ロジャースとともに』創元社。228－232頁（1986）

Ⅳ．その他

(1) 国際基督教大学カウンセリング・センター・チーフ・カウンセラー

(2) 日本集団精神療法学会　常任理事

(3)「人間性心理学研究」編集同人

(4) 大学基準協会国際交流委員会　委員（1986年３月まで）

(5) 日本・精神技術研究所ＮＰＣＣ　カウンセラー

(6) ＰＣＡウイークエンド運営委員会　代表

(7) 研修会・セミナーなど

ａ）土曜会（月例カウンセリング事例研究会）毎月第３土曜日１泊　東京

ｂ）第２回関東地区大学合同グループ・セミナー　スタフ　1985年９月12－15日　伊豆・湯ケ島

ｃ）東京グループ・アプローチ研究会　コメンター　1985年10月４－６日　東京

ｄ）臨床的グループ・アプローチ研究会　コメンター　1985年11月22－24日　広島

ｅ）日本・精神技術研究所ＮＰＣＣワークショップ　スタフ（フォーカシング担当）1986年３月26～29日　江の島

ｆ）八王子市教育センター・フォーカシング・トレーニング　講師　1986年３月

31日　八王子

g）日本・精神技術研究所ＮＰＣＣフォーカシング・セミナー　講師　1986年７月11日－12日　東京

h）臨床的グループ・アプローチ研究会合宿研修会　スタフ　1986年８月17－21日　広島

i）第112回ＰＣＡウイークエンド合宿研修会　スタフ　伊豆・伊東

(8)　講演など

a）国際市民大学（三鷹市）「教えるということ」（第１回）1985年９月28日，（第２回）10月12日，国際基督教大学

b）茨城県商工経済会人間関係研究所　カウンセリング入門講座　(1)「カウンセリングの態度と技術」1985年12月14日，(2)「カウンセリングの体験過程」1986年１月25日　水戸　茨城県商工経済会。

c）国立療養所全生園附属看護学校「病者のこころ」1986年２月28日　東京，全生園。

d）キリスト教主義学校教育同盟カウンセリング研究会，「学ぶこと，教えること」1986年５月２日　東京　明治学院

e）筑波大学集中講義　臨床心理学（フォーカシング）1986年７月１－２日　筑波大学

栗山容子助教授

Ⅰ．研究活動

1．操作行動に於ける象徴機能の発達段階と言語発達の関連

2．異文化間の社会的相互作用の研究

3．教育実習の評価に関する研究

Ⅱ．著　作

1．「言語を獲得し行使する人間」（星野　命編「社会心理学の交叉路」第４章p. 41－54

2．「コード理論」（日本教育社会学会編「新教育社会学辞典」一項）

Ⅲ．そ　の　他

1　1986．９．26－28　日本教育心理学27回総会に参加（於：国立教育研究所）

2　1986．５．16－17　異文化間教育学会第７回大会に参加（於：国際基督教大学）

3　1986．５．30．　発達研究国際コロキウム出席（於：発達科学研究教育センター）

4　1986．６．６－７　一般教育学会第８回大会に参加（於：国際基督教大学）

5　1986．７．16．　教育フォーラム「教員養成の明日をさぐる」に出席

小谷英文助教授　1986年4月1日～1986年8月31日

Ⅰ．研究活動

1．精神分析的集団精神療法の日本の臨床の場への適用のための技法の再構成に関する研究と治療者の訓練法に関する研究

2．個人の心理力動と集団の心理力動の接面がどのようにとらえられるか。それによって個人の人格構造における心理力動メカニズムがどのように再構成され得るか，治療的場の現象を直接的対象としての研究

Ⅱ．著　作

1．「援助の理論と方法」内山喜久雄・上里一郎編　看護心理学　第11章　ナカニシヤ出版　1986，121－132.

Ⅲ．その他

1．日本集団精神療法学会　常任理事　1986年4月より－現在

2．日本集団精神療法学会　学会誌「集団精神療法」編集委員　1986年4月より－現在

3．The Association of International Group Psychotherapy, 1st Pacific Rim Regional Congress, Acounting Committee, Co-chairman, 1986年5月－現在

4．講師，東京都スクールカウンセラー研修，日本精神技術研究所。担当：

① 面接の理論と方法：カウンセリング関係とカウンセラーの態度　1986年7月11日

② カウンセリング技法ワークショップ　1986年7月29日－8月1日

5．広島市精神衛生指導センター　ディケアにおける集団療法の臨床指導 1986年8月11日

6．「情緒障害児短期治療施設」（全国11施設）の記述比較研究研究班。（研究代表者：広島市愛育園・全国「情短」協議会長　杉山信作）研究世話人　1986年9月まで。

David W. Rackham 招聘助教授

Ⅰ．Research activities.

Since my arrival as a visiting assistant professor of psychology at ICU in late August, 1984, most of my energy has been directed to the development and delivery of what, for me, amounts to roughly nine or ten new courses. Moreover, I came to ICU as a short-term missionary associate (and, later, a missionary) of the United Church of Christ in Japan (Kyodan) and the United Church of Canada and, as such, have been extensively involved in activities consistent with the mandate which such a position confers. Until

recently, I have found very little time to pursue research interests with the seriousness they deserve. However, I am currently involved in the following projects which, I hope, will come to fruition this year. Further details are available upon request.

Rackham, D.W. Schooling behaviour and directed Pavlovian respondents in the black striped bass. In progress.

Rackham, D.W. The United Church of Canada in Japan. Private Circulation.

Hara, K. and Rackham, D.W. The Gross Anatomy of the Cat Brain : A Dissection Manual. In progress.

Kuriyama, Y. and Rackham, D.W. Problem solving in a cross-cultural context. In progress.

向井敦子準講師

Ⅰ．研究活動

1．援助場面における愛他的判断の条件探索。

2．対人関係における原因帰属の様相の検討。

3．日本人的対人行動の規定因に関する考察。

Ⅱ．学会発表

1．1985年9月，日本教育心理学会第27回総会において，「対人関係域差の認知 Ⅰ．中学生と大学生における援助状況の判断 Ⅱ．中学生と大学生における援助状況の判断型の分析」を発表（同論文集 p.535－537）（深谷澄男，川瀬正裕，斎藤謁との共同研究，向井はⅡを口頭発表）同発表部門の座長をつとめた。

Ⅲ．著　　作

1．「心理学的対処方略としてのスル的視点とナル的視点の二重性」国際基督教大学学報Ⅰ－A 教育研究，1985，28，p.101－126（深谷澄男との共著）

2．「乳幼児の対人行動と認知発達」対人行動学研究会編 1986「対人行動の心理学」第2章，誠信書房 p.20－34

3．「協同と競争」同上第13章第3節及び研究例 p.315－319，p.326－328

4．（翻訳）「乳児期の家族：社会的な相互作用と態度の分析」F.A. ペダーセン編 依田 明監訳（1986）「父子関係の心理学」第3章 新曜社 p.53－81

視聴覚教育研究室

＜主な研究活動＞

1．第22回日本視聴覚教育学会・第30回日本放送教育学会連合会

本研究室に事務局を置く日本視聴覚教育学会及び日本放送教育学会（会長西本三十二名誉教授）の連合大会が，福岡教育大学を当番校とし，1985年10月12日（土），13日（日）の両日，福岡県立勤労青少年センターで開催された。自由研究は24件あり，シンポジウム及び課題研究は次のようなテーマで行なわれ，研究室から中野教授，阿久津教授，石本教授，および大学院生が参加した。

シンポジウム：視聴能力の育成をめぐる諸問題
課題研究Ⅰ　：コンピュータ社会における放送・視聴覚教育の課題
課題研究Ⅱ　：総合学習におけるメディア利用の促進

2．修士論文発表会

1986年3月28日

発表者	題目
野辺田洋子	コンピュータによるドリル・プラクティス学習の効果に関する実証的研究

3．その他

横田淳子，北條礼子，岩佐玲子，田地庸子らは，研究協力者として，中野教授，石本教授と共に東洋（東大名誉教授）を代表者とする「外国語教育における音声つき静止画再生装置の適用に関する基礎的研究（文部省科学研究費によるプロジェクト）」に参加，次の2つの研究を行なった。

1　外国語教育プログラム作成にかかわる基礎的要因を明らかにするための研究
2　外国語教育CALプログラムの開発に関する研究

佐々木輝美は武藤栄一（視聴覚教育専修，博士前期課程1984年度修了）および阿久津教授と共に「テレビといじめ」についての研究を行なった。

＜人の動き＞

赤枝紅子，神山正人，河合剛，野辺田洋子は任期満了で3月末日に，深山こずえは交換留学のため6月末日に非常勤助手を辞し，一方，北條礼子，岩佐玲子，佐々木輝美，田地庸子，岡見英一，来嶋洋美，駒井利江，田口三奈の8名が4月より新たに非常勤助手に就任した。

阿久津喜弘教授

Ⅰ．研究活動

(1)「新教育社会学辞典」の共同編集。
(2)　青少年非行とマス・メディアに関する研究。

(3) 現代教育研究会の一員としての活動。

Ⅱ．学会発表等

(1) 日本教育社会学会第37回大会（1985年10月３日－５日，お茶の水女子大学）における「教育内容・教育方法」部会の司会。

Ⅲ．著　　作

(1) 「16ミリ映画の５年後は一」『視聴覚教育』40巻４号，1986年４月，31－32頁。

(2) 「情報化社会における創造性の意味」『学習指導研修』９巻３号，1986年６月，34－37頁。

(3) 「情報活用能力についての疑問」『教職研修』14巻12号，1986年８月，52－53頁。

Ⅳ．そ　の　他

(1) 日本視聴覚教育学会理事，編集委員。

(2) 日本放送教育学会理事，編集委員。

(3) 日本教育社会学会監査。

(4) 三鷹市社会教育委員。

(5) 自治研修協会「視聴覚教材の有効利用に関する調査研究委員会」委員。

(6) 講義「コミュニケーション能力の育成」
コミュニケーション研修講座（1986年８月26日，新潟県立教育センター）。

中野照海教授

Ⅰ．研究活動について

1985年度，および今年度にかけて研究助成を得たもの，および継続しているものは，以下の通りである。

1）「外国語教育における音声つき静止画再生装置の適用に関する基礎的研究」（文部省研究助成総合Ａ，ＩＣＵ班主査）

2）「多メディア時代における教育放送の役割」（放送文化基金共同研究者）

3）「放送教育50年――その検証と展望」（放送文化基金，研究助成と出版助成，編集委員長）

4）「アジア教育放送シンポジウム開催――国際協力における技術移転の課題」（放送文化基金共同研究者）

5）NTT・情報通信総合研究所研究助成，大学におけるINS利用の教育実験，1985，共同研究者。

6）「視聴覚教育の評価に関する研究」は，新しい資料を加えて再検討した後，『視聴覚教育の研究と評価』（日本視聴覚教育協会）として出版予定。「大学における遠隔教育の実験的研究」は終了したが，いずれかの研究助成を得て実施の予定。「教育過程における映像の役割」の研究では，理論枠の再検討と資料の収集をお

こなっている。

Ⅱ．学会発表等

1）司会とまとめ，「世界各国の教育へのマイコン利用の実情とこれからの教育」日本教育工学会シンポジウム，4月5日1986年，於工学院大学

Ⅲ．著　　作

1）「教育とINS」『ハローINS』1985，10月，78－79。

2）「多メディア時代と幼児教育（巻頭言）」『全幼放だより』1986，第9号，1。

3）「情報処理能力の育成――その意味と方策」『埼玉教育』1986，3月，2－5。

4）「人造りシステム」としての教育の諸問題，『計画行政』1985，第15号，2－10。

5）「問題志向研究から基礎的研究の方向も」『教育工学実践シリーズ』1986，75巻，18－21。

6）「教育工学の現状と課題」『東北学院大学教育研究所紀要』1986，第5号，75－83。

7）「放送教育――今日の課題」『放送教育』1986年4月，12－13。

8）「X館の理念と背景――教育メディア利用の総合性と開放性をめざして」『大学時報』1986年5月，104－108。

Ⅳ．そ　の　他

1）基調講演「視聴覚教育の将来と視聴覚センター」関東視聴覚教育連盟，1985．9．5．

2）講演「コンピュータ社会における教師の役割」埼玉県南教育センター，1985．10．30．

3）講演「ニューメディア時代における地域と放送」くらしに生かす放送利用全国大会（NHK，文部省，松山），1985．11．7．

4）報告「INSと教育の課題」INSモデルシステム実験報告会（日本電信電話），1985．11．15．

5）講演「教育工学の現状と課題」東北学院大学教育研究所，1985．11．20．

6）講演「多メディア時代における放送教育と教師の役割」関東甲信越放送教育研究会，1985．11．28．

7）Lecture, Problems on Evaluation of Audiovisual Education, JICA, Okinawa Center, 1986. 2. 12／13.

8）「ニューメディアと教育（シンポジウム）」教育システム研究所，1986．2．22.

9）放送「多メディア時代における教師の役割」NHKラジオ，1986．3．29.

10）Lecture, Problems on Evaluation of Audiovisual Education, JICA, Okinawa International Center, May 26－27, 1986.

11）講義「技術指導の方法」国際協力事業団，1986．6．13.

12）講演「INS教育実験から」日本地域開発センター，1986．6．28.

13) 研究協議「これからの視聴覚教育」文部省社会教育研修所，1986．7．23.
14) 講演「多メディア時代の放送教育」全国放送教育研究連盟特別研修会（於日本青年館），1986．8．29.
15) 講演「情報化社会における教育の問題」北区教育委員会，（赤羽会館），1986．8．26.
16) 講演「教育に於けるマイコンの利用について」埼玉県教育委員会，1986．8．30.
17) 学会等における役職・委員
1．日本視聴覚教育学会理事，編集委員「視聴覚教育研究」
2．日本放送教育学会理事，編集委員長「放送教育研究」
3．常任編集委員，編集幹事「日本教育工学雑誌」（文部省・教育工学センター協議会）
4．日本語学ラボラトリー学会評議員
5．日本教育工学会理事，広報委員，運営小委員会委員，研究奨励賞委員会委員
6．文部省社会教育審議会委員，教育メディア分科会委員，社会通信教育分科会委員
7．文部省教育放送分科会・コンピュータと教育のあり方小委員会主査
8．文部省学術審議会（科学研究費分科会）専門委員
9．国立民族学博物館展示委員会委員
10．国立民族学博物館電算機委員会委員
11．国立放送教育開発センター客員教授
12．NHK学校放送中央諮問委員会委員
13．「視聴覚教育賞」（文部省，日本視聴覚教育協会）選考委員
14．AVCC理事・視聴覚教育国際協力委員会委員
15．日本教育工学協会理事

石本菅生教授

1　研究活動

(1) 文部省科学研究費による研究［外国語教育における音声つき静止画再生装置の適用に関する基礎的研究（代表者　東　洋元東大教授）］に研究分担者として参加
(2) データレコーダによる音声再生システムの開発並びに語学用CAIへの利用研究
(3) CAIシステムにおける corrective feedback の効果に関する実験的研究

2　研究発表等

(1) マイクロコンピュータを用いた英単語学習の効果に関する実証的研究

ICU教育研究　27，p．155－181，1985（岩佐玲子と連名）

(2) 英語自主学習における辞書利用の非効率性に関する分析
第22回日本視聴覚教育学会・第30回日本放送教育学会合同大会研究発表論文集，p．23－24，1985（岩佐玲子と連名）

(3) マイクロコンピュータを用いた日本語速読自主訓練システムの開発
第22回日本視聴覚教育学会・第30回日本放送教育学会合同大会研究発表論文集，p．25－26，1985（田地庸子と連名）

(4) マイクロコンピュータの教育的利用，視聴覚教育　9，p．38－41，1985

佐々木輝美助手

Ⅰ．研究活動

1．テレビと「いじめ」に関する研究

2．吉田秀雄記念事業財団の研究助成によるテレビコマーシャルに関する研究

Ⅱ．著　　作

「テレビ暴力に関する実証的研究の概観」，ICU教育研究　28，1986，127－156.

岩佐玲子助手

Ⅰ．研究活動

1．外国語教育に関する基礎的研究

2．外国語学習へのＣＡＩの適用

3．昭和60年度科研総合（A）ＩＣＵ班「外国語学習における音声つき静止画再生装置の適用に関する基礎的研究」（代表者，東洋）のうち，英語及び日本語学習プログラム作成と評価を分担。

4．昭和61年度「ＩＮＳによる教育，防災システム調査研究」（三鷹市一（財）日本地域開発センター共同研究）に参加。教育システムの調査と評価を担当。

Ⅱ．学会発表

1．1985年10月12日　第30回日本放送教育学会・第22回日本視聴覚教育学会合同大会において，「英語自主学習における辞書利用の非効率性に関する分析」を発表（石本菅生と共同研究，岩佐が発表）。

北條礼子助手

Ⅰ．研究活動

1．英語熟達度測定技法としてのクローズテストの研究

2．昭和60年度科研総合（A）ＩＣＵ班「外国語学習における音声つき静止画再生装置の適用に関する基礎的研究」（代表者，東洋）のうち，英語学習プログラム作成と評価を分担。

3．昭和60年度「大学におけるＩＮＳの実験的研究」（ＩＣＵ－情報通信総合研究所協同研究）に参加。調査表の作成と評価を分担。

Ⅱ．学会発表

1．1985年９月27日　教育工学関連学協会連合全国大会において，“Comparison between the Multiple-Choice Cloze Test and the Open-Ended Cloze Test as an English Proficiency Test” を発表（同論文集　97－98頁）（松田稔樹・坂元　昂（東京工業大学）との共同研究，北條が発表）

2．1985年10月27日　大学英語教育学会において，「クローズ法の実証的研究：文章の選択と検討」を発表（同プロシーディングズ　140－143頁）

Ⅲ．翻　　訳

1．ジョン・セルフ著，坂元　昂監訳「ＣＡＩソフトウェアの現状と展望」（原題 ”Microcomputers in Education—A Critical Evaluation of Educational Software—”, The Harvest Press）第一部（13～43頁）を担当，アスキー出版局，1986年５月発行

田地庸子助手

Ⅰ．研究活動

1．コンピュータを用いた日本語学習支援システムの基礎的研究と開発。

2．昭和60年度科研総合（A）ＩＣＵ班「外国語学習における音声つき静止画再生装置の適用に関する基礎的研究」（代表者，東洋）のうち，日本語学習のプログラム作成と評価を分担。

Ⅱ．学会発表

1．1985年９月14日　日本語教育学会研究例会において「マイクロコンピュータを用いた速読用教材システムの開発」を発表。

2．1985年10月12日　日本視聴覚教育学会において「マイクロコンピュータを用いた日本語速読自主訓練システムの開発」を発表（石本菅生と共同研究，田地が発表）。

理科教育法研究室

1）物理学のドナルド・Ｃ・ウォース教授が1986年７月から1987年３月まで研究休暇で米国に滞在中である。

2）理科教育の公開セミナーが以下の通り開催された。

a）1985年11月２日（土）午前，理学館Ｎ－231室

演題：現代科学への東洋からの貢献 ”Is the Orient relevant to Modern Sci-

ence?"

講師：Dr. Benfey（米国Guilford大学教授）

b）1986年6月14日（土）午前，理学館N－203室

「ベンフィー教授を囲んで」

c）1986年6月21日（土）午後，理学館N－203室

「玉田泰太郎氏（元渋谷区立長谷戸小学校教諭）を囲んで」

3）1986年8月24日（日）－29日（金）上智大学で開催された物理教育に関する国際会議（International Conference on Trends in Physics Education，日本物理教育学会およびＩＵＰＡＰ物理教育国際委員会主催）に柿内賢信先生をはじめ本学理科教育関係者が多数参加した。

また，海外からの同会議参加の中で本学を訪問された方とは，理科教育法研究室で情報交換が行われた。

4）柿内先生および田坂興亜準教授を中心に，理科教育に関するセミナーが毎週開かれていて，ＩＣＵ関係者だけでなく学外からも常時参加者があり，活発な研究討論が行われている。

高橋　詢大学院教授

Ｉ．研究活動

a）レーザー光及び定条光による光化学反応

b）励起原子による化学反応

c）NMRによる分子間相互作用

d）化学進化

Ⅱ．学会発表等

国際生命の起源学会（International Society for Study of Origin of Life）（Berkeley, California）7月21日－25日　1986年

Studies on the Structure of HCN Oligimers.

K. Umemoto, M. Takahashi,
K. Yokota and N. Noto.

三宅　彰教授

Ｉ．研究活動

1）櫛形高分子に関する排除体積効果をくりこみ群の方法で計算し，セグメント密度の高い領域では鎖の拡がりが大きいことを確かめた。

2）昭和60，61年度文部省科学研究費総合研究（Ａ）「高分子集合体の構造と機能発現機構に関する基礎的研究」研究分担者。

Ⅱ．学会発表等

1）「溶液物性」，高分子討論会レビュー講演，1985年９月26日（北海道大学）。
2）「Internal Chain Conformations of Comb Polymers」，Japan－U. S. Polymer Symposium，1985年10月31日（京都平安会館）。
3）「Excluded Volume Effects in Comb Polymers」，総合研究班合同研究会，1986年１月31日（鳥羽石鏡）。
4）「くし形高分子の排除体積効果」，日本物理学会第41回年会，1986年３月30日（青山学院大学）。
5）「枝分れ高分子の物性の違い」，高分子材料自由討論会，1986年７月17日（犬吠崎）

Ⅲ．著　　作

1）「科学技術の方法・役割と理科指導」，学習指導研修Vol. ９－２，５月号（1986）46～49頁。

Ⅳ．学会その他の活動

1）社団法人日本物理学会常任理事，庶務理事兼任。事務局問題特別委員会・出版委員会・国際交流小委員会の各委員。
2）社団法人大学セミナー・ハウス常務理事，評議員。
3）三鷹市教育委員会社会教育課，青少年科学館建設専門委員。
4）“Reports on Progress in Polymer Physics in Japan” 編集委員。
5）広島大学大学教育研究センター研究員集会「大学入試と教育改革」出席，1985年11月15－16日（広島大学）。

石川光男教授

Ⅰ．研究活動

1．トリチウム水による核酸損傷の分子構造。
2．核酸に対する真空紫外線照射効果。
3．変成意識状態における脳波スペクトルの変化。
4．磁気・遠赤外処理水の構造変化。
5．科学と文化の相互関連性。

Ⅱ．学会発表等

1．日本放射線影響学会：「トリチウム水によるDNA－本鎖切断の線量率依存性」（高倉かほる，石川光男），1985年10月18日，奈良。
2．核融合特別研究報告会：トリチウム水による核酸の損傷及び不活性化の機構」（石川光男，高倉かほる），1986年２月３日，東京。
3．ホリスティック医学シンポジウム：「ホリスティック医学の時代的要請」，1986年，６月10日。
4．International Conference on Oriental Thought and Modern Science：

Cultural Background as an implicit parameter of science", July 16, 1986, Seoul, Korea.

5．喫煙と健康に関する研究発表会：「喫煙と脳波活動に関する研究」，1986年7月18日，東京。

Ⅲ．著　　作

1．Single-Stand Breaks in DNA Induced by Tritiated Water, K. Takakura, M. Ishikawa, Report Polymer Phys. Japan, 28, 1985.

2．「生命思考」，ＴＢＳブリタニカ，220頁，1986。

Ⅳ．そ の 他

1．講演：「現代文明とニューサイエンス」，朝日カルチャーセンター・横浜，1986年7月8日

2．　〃　：「意識と物質のリズム」，心霊科学研究夏季講座，1986年8月17日，東京。

3．「心の時空・物質の時空」，『心霊科学研究』，1986年1月～3月。

4．「宗教と科学は調和するか」（対談・遠藤周作），『あけぼの』，1986年4月。

5．「ものと心のフラクタル構造」，『たま』，1986年4月。

6．「創造性活性化のための人材開発」，『経営コンサルタント』，1986年5月。

7．「異常のない救急患者」，『看護』，1986年7月。

8．「脳波と生命のリズム」，『アルファ・サイエンス』，1986年，7月。

9．パブリックヘルスリサーチセンター評議員

10．日本ストレス学会理事

勝見允行教授

Ⅰ．研 究 活 動

昭和61年度文部省科学研究費補助金特定研究「植物の生活環制御機構の動的解析」のうち，「栽培植物における生理特性の解析と制御」の研究代表者。主として植物の矮性発現機構と植物ホルモン，細胞壁構造等の面から解析している。また，新しいホルモンであるブラシノライトの生理作用，特に膜機能への作用を検討している。

Ⅱ．学 会 発 表

1．勝見允行・山根久和・C. Spray・J. MacMillan・高橋信孝・B.O. Phinney. ジベレリン非感受性トウモロコシD_8の矮性発現と内生ジベレリン，日本植物学会第50回大会，1985年10月，新潟。

2．勝見允行・山根久和・C. Spray・J. MacMillan・高橋信孝・B.O. Phinney. 矮性トウモロコシD_8と正常株の内生ジベレリンの比較，植物化学調節学会年会。

山口俊夫教授

Ⅰ．研究活動

除神経昆虫筋におけるグルタメイト拘縮について。

Ⅱ．学会発表

1．昆虫筋グルタメイト拘縮に対する除神経の影響。山口俊夫・鷲尾　宏・日本動物学会第56回大会，東京1985年10月。

2．Degeneration and Regeneration of Neuromuscular Junctions at the Insect Muscle　T. Yamaguchi, H. Washio XXXth Congress of International Union of Physiological Sciences. Vancouver, B.C. Canada, July 13−18. 1986

田坂興亜準教授

1．研究活動

a．食品中の残留農薬の分析

b．発展途上国の理科教育
　――タイを中心にして

4．その他の活動

a．1986年1月10日－15日にマニラで開かれた World Council of Churches a "New Technology, Work and the Environment"という会議に guest speakerとして招かれ，"Chemical Contamination of Human Environment"と題する講演を行なった。

b．1986年1月12日放映の日本テレビ「シリーズ食糧Ⅱ――奇形ザルは訴える」に，食品の農薬汚染に関する部分で出演。

c．本学に在学中の一盲学生が理学専攻生として実験科目の履修をどのように行なったかを「"明日への大学続編――ICUにおける一盲学生の物理実験・化学実験履修の記録」として吉野準教授と共に編集し，発行した。(1986年3月31日)

d．1986年6月7日－8日，一般教育学会第8回大会が本学において開催され，同学会常任理事として，また開催校の一般教育主任として，その準備，実行にたずさわった。

英語教育法研究室

English Teaching Department (co-sponsored by SLL and IERS) held the following lectures.

Friday, 18 October, Dr. Yasuaki Abe (Rikkyo University), "An issue in

Japanese anaphora".

December 6, 1985 (Friday), Professor Reiko Shimamura (Tsuda University), "On lexicalization".

January 18, 1986 (Saturday), Professor Shin Oshima (Kochi University), "GB Theory and Barriers".

May 12, 1986 (Monday), Dr. Noriko Akatsuka, "Conditionals revisited".

August 27–28, (Wednesday, Thursday), The 25th ICU Summer Institute in Linguistics was held with Professor Thomas Roeper as the institute lecturer. 24–25 August, 1986 (Sunday, Monday), a seminar was held by ETD students at University Seminar House, Hachioji.

小林栄智教授

I. 研究活動

(1) 古英語散文のなかでもユニークな存在として知られる*Apollonius of Tyre*についての研究を "On the 'Lost' Portions in the Old English *Apollonius of Tyre*" (1979) として発表したものが Stanley B. Greenfied and Daniel G. Calder, *A New Critical History of Old English Literature*, New York Univ. Press, New York and London, 1986 のなかで好意的に取りあげられたことに意を強くして1986年の夏休みを全面的につかって "The Old English *Apollonius of Tyre* Is Complete As It Stands" をまとめることができた。この論文は『教育研究』29号にでることになっている。

この古英語散文の作品を構文面，語い面からさらに研究を続けたい。

(2) 中英語初期の資料である*South English Legendary*の語い構成，意味変化の研究。

(3) 大学・高校英語教材の研究・作製。とくに高校英語教科書を作製することにより，今日の高校英語のアウトラインをつかむことができたように思われる。これを基にして大学における英語教育をさらに研究してみたい。

II. 著　　作

(1) 『新高等学校英語II　Why English II』(共) 学校図書，1985，196

(2) 上記の*Teacher's Manual* (共) 学図，1986，335

(3) 上記の*Workbook* (共) 学図，1986，64

(4) 『新高等学校II－B　Read English』(共) 学図，1985，184

(5) 上記の*Teacher's Manual* (共) 学図，1986，342

(6) 『新高等学校II－C　Write English』(共) 学図，1985，144

(7) 上記の*Teacher's Manual* (共) 学図，1986，189

(8) 上記の*Workbook* (共) 学図，1986，80

(9) 『ポケット和英辞典』(編集・共) April 1985－

Ⅲ. そ の 他

(1) 日本英語学会・評議員

(2) 日本中世英語学会・評議員

(3) 講演 "English As an International Language——Listening Comprehension First——" (英文) 群馬県高等学校教育研究会・英語部会, 於群馬県立藤岡工業高等学校1985. 11. 27

村木正武教授

Ⅰ. 研 究 活 動

a. Montague Grammar, Generalized Phrase Grammarの枠組みによる日本語の文法範疇の設定。

b. 外国人の日本語の発音スペクトログラフによる分析。

Ⅱ. 学会発表等

1984. 10. 7. 「日本語の標準的分析」, 特定研究『言語の標準化』研究発表会, 国立国語研究所。

1985. 3. 28. 「てある構文の句構造分析」, 論理文法研究会シンポジューム『論理文法と論理学, その接点』, 港区みなと図書館。

1986. 9. 13. 「ＧＰＳＧと日本語」, 日米文科学術交流センター公開講演, 神戸大学文学部。

Ⅲ. 著 作 等

1984, 「日本語の受動文の標準的分析」, 昭和59年度文部省科学研究費補助金 特定研究 (1) 総括班編, 『情報化社会における言語の標準化 (中間報告)』, pp. 29－30.

1984, "Syntactic categories in Japanese", 石本 新編, 『自然言語処理の為の言語学に関する研究』, 東京理科大学, pp. 144－160.

1985, "Categorial analysis of passivization and reflexivization of Japanese", 井上和子編, 『明確で論理的な日本語の表現 (昭和54年度文部省科学研究費補助金特定研究最終報告)』, ＩＣＵ, pp. 113－138.

1985, 「日本語受動文と再帰化の句構造分析」, 『月刊言語』, 大修館書店, 14: 11: 97－105.

1986, 「チョムスキーとモンタギュー文法」, 『チョムスキー小事典』, 大修館書店。

1986, "Syntactic categories in Japanese", *Educational Studies*, 『教育研究』, ＩＣＵ, 28: 187－204. (Revised version of Muraki, 1984, "Syntactic categories in Japanese").

1986, "Some problems of *tearu* sentences in Japanese", *Educational Studies*, 『教育研究』, ＩＣＵ, 28: 221－236.

Forthcoming, "Conjunction *ga* and contrastive *wa*."
Forthcoming, "On comparative *yori*."
Forthcoming, "On *tai* and *garu*."

Ⅳ. そ の 他

評議員，日本英語学会，1983－
編集委員，*English Linguistics*，日本英語学会，1983－
幹事，論理文法研究会（会長：石本　新），1983－
委員，日本言語学会，1985－
客員研究員，言語文化研究所，津田塾大学，1985－
専門委員（学術用語分科会），学術審議会，文部省，1986－

R. リンディ教授

1. Continued study of Applied Phonetics and Phonology (i. e., pronunciation for FEP, ELP, "Adv. Pron." and other work outside of FEP.
2. a) Four presentations to missionary-teachers on English Teaching. Total: 12 hours
   b) Week-long seminar/workshop for English Teachers, sponsored by The Christian Schools Council of The Coc.
3. Editing and writing of texts for all levels from 1st year Middle School to 3rd year High School. Preparation of Texts and Scripts for recording, and The recording of The same. All for Kairyudo. (Publishers) New Prince Series. Sunshine Series.

F.C. パン教授

Ⅰ. 研 究 活 動

My research as usual for this academic year concentrated on three areas: (1)Linguistics (i. e., Sociolinguistics, Historical Linguistics, and Child Language Acquisition), (2)Neurolinguistics, and (3)Sign Language. The first area included discourse analysis and child language, i, e., developmental sociolinguistics, and the phonology of proto-Japanese based on internal reconstruction. For this, an article entitled "On the Acquisition of Discourse among Autistic Children" was sent to Dr. Blount for an anthology and another article entitled "Hogen ni Nokoru Kodai Nihon go no On In" (The Phonology of Proto-Japanese as observed in Modern Dialects) was submitted to Wa Sen Sho In for an anthology.

The second area was probably the most exciting of all, because I not only

had the occasions of becoming a research fellow of the Miyagi Hospital (Kokuritsu Ryōyō Sho) but also a consultant of the MacKay Memorial Hospital of Taipei. On the basis of these professional contacts, I presented five papers at the 7 th ICU Conference on Neurolinguistics (Nov. 23－24, 1985).

The third area brought me back to the construction of a sign language dictionary which will contain about 10,000 entries. The work is now under way in the form of drawings and lexical descriptions of the drawings of signs.

In addition, I also organized the annual event of: (1) The 11th ICU Conference on Sociolinguistics (July 20－21, 1985), the 9th ICU Conference on Child Language Acquisition (July 20, 1985), the 7th ICU Conference on Neurolinguistics (Nov. 23－4 , 1985), and the 9th ICU Language Sciences Summer Institute. (July 22－6 , 1985).

Ⅱ. 学会発表

1. "Patterns of Information Retrieval from LTM in the Process of Verbalization by a Fluent Conduction Aphasic: A Chinese Case," The 7th ICU Conference on Neurolinguistics, Nov. 23, 1985. With Cecil Chang.
2. "Semantic Jargonaphasia: A Taiwanese-Japanese Bilingual Case," The 7th ICU Conference on Neurolinguistics, Nov. 23, 1985. With San-Yong Huang and Lie-Gan Chia.
3. "単純ヘルペス脳炎後，著明な記憶障害を呈した例の「漢字・かな」の記銘について。" The 7th ICU Conference on Neurolinguistics, Nov. 24, 1985. With Kazuko Fukushima and Yasuo Haridani.
4. "Agrammatism and Conduction Aphasia: A Chinese Case," The 7th ICU Conference on Neurolinguistics, Nov. 24, 1986. With Yiu-Tong Chu and Kai-Pin Yau.
5. "Agrammatism of Chinese Transcortical Aphasics," The 7th ICU Conference on Neurolinguistics, Nov. 24, 1985. with Yi-wen Chia, Yi-Chi Wang,and Chun-Jen Shih.
6. "Laterality Effects in Agrammatism, "The 2nd Conference of the Aphasia Committee, International Association of Logopedics and Phoniatrics, Brussels, June 12, 1986.
7. "Semantic Jargonaphasia in the Light of a Taiwanese-Japanese Bilingual Acase," Biological Aspects of East Asian Languages, Asian Studies Association of Australia, 6th Biennial Conference, University

of Sydney, 14,1986.

8. "Agrammatism in Chinese," XXth Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics, August 5, 1986.

9. "Agrammatism in Chinese and Trascortical Aphasia," XXth Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics, August 4, 1986.

10. "Social Competence and Aphasic Speech: The Need to Examine the Patterns of Correlations between Kinesic and Linguistic Code," XXth Congress of the International Association of Logopedics and Phoniatrics, August 6, 1986.

II. "Language and Cross-Cultural Communication: East and West," Keynote Lecture of the International Conference on Cross-Cultural Communication: East and West, Seoul, Korea, August 7, 1985.

Ⅲ. 著作と発表論文

1986 a *Language Sciences*, Vol. 8, No. 1, Editor

1986 b *Language Sciences*, Vol. 8, No. 2, Editor

1986 c *Variation of Language* (ことばの多様性), Edited with Kyoko Yashiroand Koji Akiyama, Hiroshima: Bunka Hyoron Publishing Company.

1986 d "Language and Cross-Cultural Communication: East and West," in *Cross-Cultural Communication East and West*, pp. 13－42, John H. Koo and Robert N. St. Clair (eds.), Seoul: Samji Publishing Company.

Ⅳ. そ の 他

Intensive Course (集中講義) at Miyagi University of Education, August 25－30, 1986.

2. 大学院教育学研究科修士論文

1986年3月卒業者　17名

A. 教育哲学

1. 佐野　仁美　東京都中野区における「教育委員選び」
—教育委員準公選運動にみる下からの教育改革—

2. 篠原　　裕　イマヌエル・カントにおける教育的人間観の一考察

B. 教育心理学

3．乙竹　佐和　障害児のきょうだいの危機とその諸特性に関する一研究
4．鈴木奈保子　スモールグループにおいてリーダーがグループプロセスの発展に与えた影響について
5．福田　憲明　フォーカシングの過程におけるフォーカサー・リスナー関係の研究
6．山中　淑江　グループ・プロセスにおける構造の変化とその影響
—エンカウンター・グループの一事例を通して—

C. 視聴覚教育法

7．野辺田洋子　コンピュータによるドリル・プラクティス学習の効果に関する実証的研究
—適応型プログラムと非適応型プログラムとの比較—

D. 英語教育法

8. 青柳　宏　Lexical Rules and Argument Structure in English
9. 井川　肇　On the Validity of the Binding Theory
10. 加倉井真理子　A Study of Spelling Difficulty for the Japanese Learners of English
11. 小泉　孝子　A Study of the Old English Word Order in King *Alfred's Pastoral Care*: with Special Emphasis on the Finite Verb
12. 長島　敏子　A Study of the Use of Women's Language in Present-Day Conversational English
13. 崎山　詩子　An English Teaching Method on the Basis of Semantic Analysis of Verbs
14. 作山　想子　On Gerund—Government and Binding Approach—
15. 竹波　洋子　Problems in Learning the Five Sentence Patterns of English Found in Japanese High School Students
16. 宇野　園子　Syntactic Impairment in Aphaia: Characteristics and Underlying Mechanisms in Broca's and Wernicke's Aphasia

E. 理科教育法

17. 高柳　悦夫　発展途上国の理科教育（ネパール，フィリピン，タイの事例研究）

1986年6月卒業生　4名

A. 教育心理学

1．田代　順　「人格障害」の子供へのアプローチとその母親との面接過程

2．山口　紀子　思春期ロールシャッハ反応における「目」と「顔」サインに関する基礎的研究

B. 視聴覚教育法

3．河合　剛　外国語聴取理解における発話者映像提示に関する実証的研究

C. 英語教育法

4．関口　昌昭　A Study of the Indicative and the Subjunctive Moods in AELFRIC's Prose (E)

3．教職課程委員会報告

1．教育実習報告

1985年度教育実習には91名の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

1）**実習生総数**　91名

男　子　21名

女　子　70名

2）**実習日程及び実習校**

4月8日～20日	ICUHS
5月2日～18日	聖学院（東京）
5月13日～6月8日	茗渓学園高校（茨城）
5月25日～6月8日	神戸大教育学部（附）住吉中
5月27日～6月8日	保谷市立ひばりが丘中（東京），加茂市立若宮中（新潟），大手前高（大阪），泉崎中（福島），長野高
5月27日～6月11日	弓ケ浜中（鳥取）
5月29日～6月11日	青森高
6月1日～14日	土佐女子高，川越高，梅光女学院高（山口）
6月3日～15日	八王子市立中山中，立川市立七中，武蔵野市立一中，同五中，三鷹市立一中，同三中，同四中，国分寺市立一中，小石川高，葛飾野高，府中高，日野市立三中（東京），ICUHS，高田高（新潟），永見高（富山），光陵高（神奈川），松蔭（愛知），鳥山高（栃木），いわき女子高（福島），成渓中・高（東京），喜多方高（福島），松山東（愛媛），足利市立一中（栃木），|

	三島市西方中（福島），豊北高（山口），真岡女子高（栃木），淳心学園中・高（　　），北陸学院高（石川），精華女子高（京都），弥永高（神奈川），宮崎南高，沼津市立大岡中（静岡），千葉高，九州女子学園高（福岡），敬和学院高（　　），佐倉市立臼中（千葉），国府台中（千葉）
6月10～22日	大田区立安方中（東京），大阪教育大（附）天王寺中，七尾高（石川），長田南中（静岡），三育学院高（広島），大館鳳鳴高（秋田），東洋英和女学院（東京），群馬大（附）中，川和高（神奈川），目白学園，三鷹市立七中（東京）
6月17日～28日	横浜共立学園高（神奈川），横浜市立いずみ中，国立市立一中（東京）
6月21日～7月4日	清泉女学院中・高（神奈川）
6月23日～7月5日	西南女学院高（鹿児島）
6月24日～7月6日	盛岡市立一中（岩手）
6月25日～7月7日	盛岡高（岩手）
8月26日～9月6日	北星学園女子中・高（北海道）
9月1日～14日	倉敷市立北中（岡山），松山東高（愛媛），浜松高（静岡）
9月3日～13日	活水高（熊本），伊東市立北中（静岡），梅花学園高（大阪），山梨英和学院高
9月9日～21日	小金井市立緑中，同二中，三鷹高（東京）
9月23日～10月5日	調布市立七中（東京）
10月14日～26日	江戸川区立端江中（東京）
10月18日～31日	世田谷学園高（東京）

3） 実習生学科別

実習参加学生の学科・研究科別の内訳は次のとおりである。

学科＼性別	男	女	計
人文科学科	1	11	12
社会科学科	6	14	20
理学科	1	4	5
語学科	4	22	26
教育学科	4	14	18
教育学研究科	0	3	3
行政学研究科	0	0	0
比較文化研究科	1	0	1
聴講生	4	2	6
合計	21	70	91

4） 実習生教科別

教育実習教科別の内訳は次のとおりである。

学科＼性別	男	女	計
社会	2	5	7
理科	2	4	6
数学	0	1	1
外国語(英語)	16	60	76
宗教	1	0	1
合計	21	70	91

2．教員免許状取得状況報告

1986年3月卒業生365名（学部332名，大学院32名）専攻生1名中，一括申請により教員免許状を取得した学生（聴講生は除く）の詳細は次のとおりである。

1） 教養学部学科別教免取得学生数

学科	免許状取得者実数	中学校教諭一級免許状	高等学校教諭二級免許状
人文科学科	11	5	11
社会科学科	13	12	14
理学科	6	6	6
語学科	19	13	19
教育学科	14	14	14
合計	63	50	64

2） 教養学部教科別教免取得学生数

種別 / 学科	社会		理科		数学		外国語(英語)		宗教	
	中学一級	高校二級	中学一級	高校二級	中学一級	高校二級	中学一級	高校二級	中学一級	高校二級
人文科学科							5	10		1
社会科学科	4	4					8	10		
理学科			5	5	1	1				
語学科							13	19		
教育学科							14	14		
合計	4	4	5	5	1	1	40	53		1

3） 大学院教免取得学生数

教育学研究科	英語教育法	5
	理科教育法	1
行政学研究科		0
合計		6

4） 専攻科教免取得学生数

教育学専攻科(英語)	1

3．教員就職状況

1985年3月卒業生のうち教員に就職した学生は次のとおりである。

公立中学校　4（英語4）
公立高等学校　16（英語16）
私立中学校　1（英語1）
私立高等学校　7（社会1，英語6）

4．ひとのうごき

■新任・就任

小谷　英文助教授（心理学）：86年4月着任。
鬼頭　当子講師　（非常勤）（図書館学）：86年4月着任。
下山田裕彦講師　（非常勤）（教育哲学）：86年4月着任。
堀野　緑助手　（非常勤）（心理学）：86年4月着任。
裏岩　秀章助手　（非常勤）（心理学）：86年4月着任。
鈴木　義也助手　（非常勤）（心理学）：86年4月着任。

田地　庸子助手　（非常勤）（視聴覚教育）：86年４月着任。
来嶋　洋美助手　（非常勤）（視聴覚教育）：86年４月着任。
岡見　英一助手　（非常勤）（視聴覚教育）：86年４月着任。
駒井　利江助手　（非常勤）（視聴覚教育）：86年４月着任。
石本　菅生教授　（計算機科学，教育工学）：教育学科長再任。1986年４月より1988年３月。
村木　正武教授　（言語学）：教育研究所長再任。1986年４月より1988年３月。
小谷　英文助教授（心理学）：学生部学生相談室カウンセラーに就任。1988年３月迄。

■昇任

立川　明助教授　（教育史）：準教授に昇任。86年４月。

■休職・帰任

原　一雄教授　（心理学）：85年９月より86年８月迄研究休暇。
川瀬謙一郎教授　（教育哲学）：86年４月より87年３月迄研究休暇。
栗山　容子助教授（心理学）：サレイ大学（英国）での１年間の研究休暇を終え，85年９月帰任。
立川　明助教授　（教育史）：ハーバート大学（米国）での１年３ケ月の研究休暇を終え，85年12月帰任。